

# 「小種の思い出と種っ子の未来を語る会」が開催されました

12月2日(日)、本校の思い出を語り合うとともに小種の子たちの限りない成長を願って、閉校記念事業「小種の思い出と種っ子の未来を語る会」が開催されました。当日は約50名の参加を得て、思い出深くそして未来に繋がる話し合いができました。また、懇親会は思い出話で大いに盛り上がりました。ご参加いただいた方々、ご協力いただいた方々に感謝申し上げます。

※ 紙面の都合で文字が細くなりました。ご容赦ください。

コーディネーター 小種小学校長 山崎 敏  
シンポジスト

- 第6代PTA会長 田口 幸男 氏
- 第25代校長 進藤 浩一 氏
- 第29代校長 茂木 達彦 氏
- 第19代PTA会長 加藤 久彦 氏

## ★第一部「小種の思い出」

○田口幸男 氏

昭和49年は100周年という、大きな節目の年だった。PTA・先生方・住民一丸となって行った。90周年の小玉さんが会長で、それを見本にして行うことにした。加藤征郎さんなどが、各部門の部長として頑張ってくれた。予算はどうしたらよいかなど、たくさん問題があったが、寄付を集めるため、小種に関わる人たちをリストアップし、協力を小願いした。寄付は、初代PTA会長さんをはじめ、主に4人の方には大きく協力していただいた。佐藤敬夫さんからは記念碑や校歌等に関わるもの、佐藤正行さん(佐藤博さんの兄)、加藤繁繁さん、加藤久雄さん(東京総合写真館、由人さんのおじいさんの弟)などに協力していただいた。記念誌の印刷、祝賀金、式典等、おかげさまで色々行うことができた。当時の先生方にも協力してもらった。校長先生は単身赴任で小種に来ていた。教頭先生や高山先生などは、下宿していた。

○山崎校長

事業推進にあたり、学校職員・地域の方々に支えられながら進められたということだが、当時、小学生だった孝宏さんや、幸喜さんは、どんな気持ちだったか?

○佐藤孝宏 さん

当時は100周年で節目なのだという感覚はなく、ただ祭りだと騒げる!という感覚でした。

○加藤幸喜 さん

私も同じで、お祭りという感覚でいたような気がする。

○山崎校長

当時は2人と3年生。俊逸さんは6年生だったと思うのだが。

○加藤俊逸 さん

私も同じような感覚でいたが、その時に校歌ができたという記憶がある。

○山崎校長

学校下のところ100周年の記念碑もある。当時部門部長として大きく関わっていた征郎さんにもお話をお聞きしたい。

○加藤征郎さん

100周年の事業に携わってきたが、財源のほうが大変な問題であった。PTA会長とともにみんな頑張った。校歌は敬夫さんに話したら、「私が作詞しよう」と言って来て、知っている先生が、「では私が作曲しよう」と言って来て、私たちがともに持つてきてく

れた。初めて校歌を聴いたのは、その時にいたPTAの者、私たちではなかったかなと思う。

○山崎校長

100周年事業がなければ、校歌はできていなかったかもしれない。



○進藤浩一 氏

つかしい顔がたくさんでほっとしている。この学校を離れて15年と8ヶ月たった。最初の3年間、3年間と言っても学校には1年の年数しか関わって行っていた。昭和63年教育研究所に専任で行っていた。昭和63年4月から教頭として4年、そのあと校長として2年の6年間いた。教職生活の4分の1がこの地域に関係していたと言える。初めがいたときは、前の古い校舎で、薪小屋もあった。自分の育った学校も木造だったので、とても懐かしい感覚があった。当時は元気がいいの佐々木校長で、私は6年生の担任だった。運動会が特に印象的だ。農業が一番盛んな時期だったのではないと思う。大人たちはみんな「私たちは難儀したから、子どもはそんな思いはさせたくない」ということで、当時の子どもは発表を聞くと「昨日レストランに行きました。」などというものが多く、毎週遊びに行っても大丈夫なのかと職員室で話しかけもあった。冬に溜まった動物のし尿を校長先生自らが畑にまく。このおかげがほんわかとお客になるものだった。私は文書や物の運搬係をしていた。そんな中、研究所へのお話があった。昭和63年に教頭として赴任してきたときには、その頃と景色が変わっていた。「10年一番とよくいうが、本当に驚いたものだった。子どもたち一人一人を伸ばすこととして、花壇に花いっぱい運動」などもやった。水泳の大会で、5、6年生男子のメドレーリレーなどで優勝したのもした。その頃、体育館の工事があり、ここで、全県のへき地校研究会もあった。そのときにやったのが、「鏡台に立つ」である。たくさんの方々に褒められたいと言われた。あとに勤めたこの6年間は、それほかに思い出があって、あれから15年たった今も、数人で集まって「小種を語る会」を行っている。

○山崎校長

勢いのつた時期だったのかなと思う。亀田さんは新しい校舎ができたときのことを覚えていてる。初め校歌を聴いたのは、その時にいたPTAの者、私たちではなかったかなと思う。この学校の始まる卒業生、そして最後の卒業生に息子がいる。なにかつながりがあるように感じている。

○茂木達彦 氏

今日は6年生の顔が見られるのを楽しみにして。平成13年から14年の短い間だったがお世話になった。その中で感動したのがいくつかある。まず、入学式。新入生から「はい!」という元気な返事が返ってくるのがうれしかった。素直な、曇りなく子どもたちだなと思った。ラウンジには1年生から6年生まで、わけ隔てなくみんな遊ぶ姿があった。横はよくても縦の社会で難儀をする大人が増えているが、このような姿は新鮮で、小種のよさである。また、小種に来る前は大曲南中の教頭であった。南中の校舎も素晴らしいが、このころで課題であった。一つ何か発展させたい、ということ。宝寿会の方を学校内に呼ぼうと思った。そこで、当時の中沢会長さんとお話した。宝寿会の活動(合唱など)を学校内で子どもたちと一緒にどうかと。交流することによって子どもたちが「大人になって学習するのだ」ということをしっかりと覚えること、これを一番の目的としていた。それで宝寿会の方々も元気がなくなってしまった。小松校長先生にも「ぜひこの交流を続けてほしい」とお願いした。流川小学校との交流もその一つ。中学に上がったとき、心の壁を取り払うようなことをしていきたい。色々な意見があったが、なにより子どもたちが楽しんでいると思ってくれればよかった。そしてダルクの話。子どもたちの登下校が心配だった。しかし県も市にももちろんやらないうこと、不安を取り除くため、PTAで何とかしなければならぬということになった。

○山崎校長

6年生から、茂木先生との思い出は何かないか、として赴任してきたときには、その頃と景色が変わっていた。「10年一番とよくいうが、本当に驚いたものだった。子どもたち一人一人を伸ばすこととして、花壇に花いっぱい運動」などもやった。水泳の大会で、5、6年生男子のメドレーリレーなどで優勝したのもした。その頃、体育館の工事があり、ここで、全県のへき地校研究会もあった。そのときにやったのが、「鏡台に立つ」である。たくさんの方々に褒められたいと言われた。あとに勤めたこの6年間は、それほかに思い出があって、あれから15年たった今も、数人で集まって「小種を語る会」を行っている。

○山崎校長

勢いのつた時期だったのかなと思う。亀田さんは新しい校舎ができたときのことを覚えていてる。

○亀田公雄 さん

私が5年生のときに校舎が完成した。私たちがこの校舎の始まる卒業生、そして最後の卒業生に息子がいる。なにかつながりがあるように感じている。

○茂木達彦 氏

今日は6年生の顔が見られるのを楽しみにして。平成13年から14年の短い間だったがお世話になった。その中で感動したのがいくつかある。まず、入学式。新入生から「はい!」という元気な返事が返ってくるのがうれしかった。素直な、曇りなく子どもたちだなと思った。ラウンジには1年生から6年生まで、わけ隔てなくみんな遊ぶ姿があった。横はよくても縦の社会で難儀をする大人が増えているが、このような姿は新鮮で、小種のよさである。また、小種に来る前は大曲南中の教頭であった。南中の校舎も素晴らしいが、このころで課題であった。一つ何か発展させたい、ということ。宝寿会の方を学校内に呼ぼうと思った。そこで、当時の中沢会長さんとお話した。宝寿会の活動(合唱など)を学校内で子どもたちと一緒にどうかと。交流することによって子どもたちが「大人になって学習するのだ」ということをしっかりと覚えること、これを一番の目的としていた。それで宝寿会の方々も元気がなくなってしまった。小松校長先生にも「ぜひこの交流を続けてほしい」とお願いした。流川小学校との交流もその一つ。中学に上がったとき、心の壁を取り払うようなことをしていきたい。色々な意見があったが、なにより子どもたちが楽しんでいると思ってくれればよかった。そしてダルクの話。子どもたちの登下校が心配だった。しかし県も市にももちろんやらないうこと、不安を取り除くため、PTAで何とかしなければならぬということになった。

○山崎校長

6年生から、茂木先生との思い出は何かないか、として赴任してきたときには、その頃と景色が変わっていた。「10年一番とよくいうが、本当に驚いたものだった。子どもたち一人一人を伸ばすこととして、花壇に花いっぱい運動」などもやった。水泳の大会で、5、6年生男子のメドレーリレーなどで優勝したのもした。その頃、体育館の工事があり、ここで、全県のへき地校研究会もあった。そのときにやったのが、「鏡台に立つ」である。たくさんの方々に褒められたいと言われた。あとに勤めたこの6年間は、それほかに思い出があって、あれから15年たった今も、数人で集まって「小種を語る会」を行っている。

○山崎校長

勢いのつた時期だったのかなと思う。亀田さんは新しい校舎ができたときのことを覚えていてる。

○山崎校長

勢いのつた時期だったのかなと思う。亀田さんは新しい校舎ができたときのことを覚えていてる。

○山崎校長

勢いのつた時期だったのかなと思う。亀田さんは新しい校舎ができたときのことを覚えていてる。

○山崎校長

勢いのつた時期だったのかなと思う。亀田さんは新しい校舎ができたときのことを覚えていてる。

茂木先生は神様みたいな存在であった。わけのわからない団体について色々とお難儀をおかけした。このあとの懇親会で、色々とお話をしたい。

○加藤久彦 氏

130周年式典をやった。新しい感覚でやってくれた妻められたが、校長先生をはじめ、先生方などにも協力していただいていた。みなさんが頑張ってくれている姿を見て、我々も頑張らねばならないと。構みとして、ほんでも色々考えたが、菓落にも何か出し物をお願いしたいということ、高山純幹さんのおばあさんに踊りを踊ってもらった。私は100周年のときに4年生だった。あまり記憶はない。いざ知らなくさんして怒られたりしたが、それはまた今後の機会に、先ほどの進藤先生のお話にもあった、佐々木仁吉校長先生、肥溜めの肥料まき(指示されたこと)はいえ、子どもを校長先生が自らするんではないか。そんな自分には、肥溜めにはめてやろう!というつもりでしようとして、自分がはまってしまうり・・・ということもあった。その当時の学年の8人中4人が協和地区に今も住んでいる。大きなつながりがあるのだと思う。「生きた教育」を大事にしたい。

○山崎校長

130周年のときにできたキャラクター、ヤッタネの誕生について、鈴木瑞子先生から。○南外西小学校 教諭 鈴木瑞子先生

普段からいつも色々なキャラクターを考えていて、図案に貼ってみんなに披露していた。たまたま130周年ということ、学校のキャラクターができたら面白いのではないかと、思い、子どもたちに相談した。全校の投票で佐々木夏希さんの考えたヤッタネに決まった。その他の子どもたちが考えたキャラクターは、ヤッタネのお友達として、今も体育館に貼ってある。さらにこれを立体化したら・・・と思い、縫くろみを作った。ヤッタネの頭にある、ひょこっとした芽から、学校の教育目標である「小さな種から大きな実り」に、を表現したとてもいいキャラクターであると思う。

○山崎校長

出張中の先生方も、私の名前には知らなくてもヤッタネのことは知っていたりする。とてもよいキャラクターだ。

★第2部「種っ子の未来」

○田口幸男 氏

ゲートボール場からいつも子どもたちの様子を。冬は学校の体育館で卓球をしているの

で、休み時間に遊びに来る子どもたちも見ている。とても素直で、活発な子どもたち。立流である。今後も期待している。

○進藤浩一 氏

今まで生きてきた中から、また、地域住民として今度こそ。まず、協和小学校に統合することに前向きになってくれた保護者に感謝する。協和もは道正規模の学校になる。校舎を見たら、子どもたちの明るい姿を想像した。小規模校は、一面もあるが、逆に、人間性など、伸びるものも伸びなくなることがある。みんなは不安ではないだろう。でも、どの子どもも同じように不安なのである。しかし、子どもたちは1ヶ月もしないうちに仲良くなるだろう。パスのこともあり、時間に制限されたりにして窮屈も感じるかもしれない。親としては、1クラス30人の中できちんと生活できるかなど心配も多いだろう。しかしそれは子どもたちがすぐに仲良くできるように、時間が解決してくれるのではないかと。地域が一体となって連絡を取り合い、地域の財産として子どもたちを育てていかねばならない。鹿見島では作物を育てるのことも、スクールバスから路線バスに変更になった。これが一歩の心配事である。子どもたち、親に負担がかかる。1年生が30分以上バスに乗らなければならないということについて、体力的に心配だから何とかならないかと議会にも要請した。まだまだ問題が山積みだが、これからも考えていこう。地域協議会では大いに期待もしているが、やはり心配は尽きない。また、閉校式典については、流川小学校と小種小学校にちょっとした寄付をさせていただくこととした。統合は将来的には大変なことだと思う。

○山崎校長

地域のすばらしさ、子どもたちのよさ・思い出から現在、そして未来へとつながる話し合いができた。子どもたちの限りない成長を願っている。

★終わりの挨拶

閉校記念事業実行委員会委員長 加藤 俊逸

長時間にわたり、ありがとうございます。地域の皆さん、保護者の皆さん、ありがとうございます。閉校事業も残すところ閉校式典のみとなった。もったんと皆さんの思い出があると思うが、私自身も思い出すことばかりでできてうれしく思っている。閉校はやはり残念と改めて思うが、この閉校事業を通じて皆さんの思い出にずっと残ることを期待する。

○茂木達彦 氏

1〜5年生は大きい集団に変わる。そうすると世界が広がるが、ストレスもたまる。それを乗り越えていかねばならない。自分自身は中学生のとき少ない人数の中であつた。高校に入学したら、経験のない大ききになかなか自分を出せず、「おまえは暗いね」と言われていた。高校3年生でようやく明るくなった。狭いところで生活からだったのでもう好対応できなかった。何か一つ自信を持ち、自分でそれを見つけたときに本当に自分の自信になる。何でもいから自分の自信になるも

のを見つめることが大切である。親は人と比べるのではなく、よいところを一つでも多く見つけて伸ばしてあげようとするべきだ。鮎川から大海へ、大きくなってまた戻ってくる」という話がある。「小さな学校で大きく育つ」という話がある。子どもたちは好きだ。現に、へき地校からたくさん活躍する人も出ている。

○加藤久彦 氏

行き着くところは「人間の尊厳、痛みをわかかるようになって欲しい」というところ。色々な子どもがいて。授業を見ていて、先生方の大変さがあった。子どもたちも大きな学校に行くこと大変な思いもするだろう。色々としてスクが大きい。苦勞が多いが、ここでスクへなかつたことを持ち続けて社会に出て欲しい。あたたかい人間であって欲しいと期待する。

★まとめ

○流川振興協議会長 武藤隆男 さん

統合は心配もあるが期待が大きい。色々なお話があったが、振興協議会長としてお話しするのことも、スクールバスから路線バスに変更になった。これが一歩の心配事である。子どもたち、親に負担がかかる。1年生が30分以上バスに乗らなければならないということについて、体力的に心配だから何とかならないかと議会にも要請した。まだまだ問題が山積みだが、これからも考えていこう。地域協議会では大いに期待もしているが、やはり心配は尽きない。また、閉校式典については、流川小学校と小種小学校にちょっとした寄付をさせていただくこととした。統合は将来的には大変なことだと思う。

○山崎校長

地域のすばらしさ、子どもたちのよさ・思い出から現在、そして未来へとつながる話し合いができた。子どもたちの限りない成長を願っている。

★終わりの挨拶

閉校記念事業実行委員会委員長 加藤 俊逸

長時間にわたり、ありがとうございます。地域の皆さん、保護者の皆さん、ありがとうございます。閉校事業も残すところ閉校式典のみとなった。もったんと皆さんの思い出があると思うが、私自身も思い出すことばかりでできてうれしく思っている。閉校はやはり残念と改めて思うが、この閉校事業を通じて皆さんの思い出にずっと残ることを期待する。



記録：高橋育衣